



高柳英明・鈴木雅之・西田司 著

事例で読む 建築計画

彰国社



高柳英明・鈴木雅之・西田司 著

事例で読む 建築計画

彰国社

はじめに

建築デザインとは、単に建物をつくる行為ではなく、「人間・空間・時間」という、「間(関係)」をもつ対象を自在に紡ぎ、それらに新しい「であい」をしかけ、目に見える造形として世に送り出す素晴らしい職能であると私は考えています。人は、自分と他者がいてはじめて家族や集団といった人間関係をもつことができますが、そうしたかけがえのない関係を守りつつ、もっと豊かで楽しいものにしようとする精神がそこにある限り、建築デザインは未来にわたって求め続けられるでしょう。

一方、建築計画とは、建築デザインを初歩から学んでいこうとする者に対し、例えば図書館なら、地域人口に対する標準的な書架空間の広さや、必要諸室数といった「一般解」を、ビルディング・タイプ(住宅、集合住宅、商業建築、学校施設、図書館、市庁舎といった建築種別)ごとに示す学問としてありました。しかし、図書館の蔵書をはじめ多くの知的リソースは、今や電子メディア化が進んでおり、ゆくゆくは書架自体姿を消すかも知れません。また、ライフスタイルの多様化やソーシャルメディアの発達などによって、本や知識にふれる人々の行為あるいはシーンも、今よりずっと自由になるかも知れません。こうした時代のうねりの中では、純粋な「図書館」よりも、本や知識から派生した、あるいは触発された、さまざまな知的活動を支える「図書館のようなもの」のほうが似つかわしく、本と人との関係、人と知識との関係に、新たな「間」や「であい」が求められることでしょう。それは単なる機能の複合ではなさそうですし、従来型のビルディング・タイプの枠組みでは捉えきれないものになるでしょう。

本書は、建築デザインを初歩から学ぶ皆さんが、この茫漠とした「のようなもの」にどう対峙したらよいのかをわかりやすく示した「新しい建築計画」のテキストです。この「新しい建築計画」とは、建築の価値を認め、建築の優れた点を自分の目で読み解ける眼力を養う学問であると、私たちは考えています。その思いをもとに、本書ではさまざまな事例を通して建築への理解を深めていく内容としています。また上記のような時代の要請を考慮し、従来型のビルディング・タイプで分けるのではなく、「住む・働く・まなぶ・いやす・治す・楽しむ・集まる・再生する」といった、人や物、空間や時間を関係づける行為の語句で全6章の構成としてまとめ、さらにそれらの細分化テーマを各節のタイトルとし、1節1事例のスタイルとしてあります。また事例によっては、従前の建築計画の枠組みでは捉えきれない機能や要素を計画の中にどのように組み込んでいるのかを「具体的なかたち」として見えるよう工夫しています。特殊解を多く見せつつも、初学者が学びやすいよう、各ページの本文脇には、基本的な一般解やコラム記事をベースデータとして示してあります。本書を契機に、単なる建築の造形美や種別ごとの一般解への理解に留まらず、「人間・空間・時間」にまつわるさまざまな関係を興味深くみつけ、それを咀嚼しデザインとして発現する力を皆さんが身につけてくださるよう、私たちは願っています。

2015年2月

高柳英明

●本書の活用について

本書は、すべての建築デザインの初学者(建築学科1年～大学院課程2年生、高等専門学校生)、および建築設計関連業務に従事する初歩実務者を対象に執筆している。従来型のビルディング・タイプ別にまとめられた建築計画学のテキストと違い、建築が内包するさまざまな事象の関係でまとめられている。大学等の教育課程における設計演習課題の教

科書や参考書あるいは副読本として本書を活用する場合は、従来型の建築種別との対応があったほうがわかりやすい場合もある。その際は以下のようなクロスインデックスを用いて、自習あるいは講義実施に臨んでいただきたい。また下記対応表は15項目の区切りになっている。毎週1項目のペースで学習すれば、ちょうど半期ですべてを学ぶことができる。

●本書の活用の目安

学習の単元	章	本書の内容	該当頁	対応ビルディング・タイプ及びキーワード
1	01 住む	自然と住むⅠ…自然の摂理を巧みに取り入れた住宅	8	独立住宅、郊外型住宅
		自然と住むⅡ…農業緑地と一体になった住宅	10	独立住宅、環境共生住宅
都市と住むⅠ…極小空間の集密により空間の拡がりを感じさせる		12	独立住宅、都市型住宅	
都市と住むⅡ…都市景観を楽しむスパイラル「立体縁側」		14	独立住宅、狭小住宅	
集まって住むⅠ…集合住宅の共用部を周辺環境と連続させる		16	集合住宅、中規模ボリューム分節型	
集まって住むⅡ…「中地・長屋・囲み型」で都市的中庭を		20	集合住宅、中規模中庭型	
集まりのしかけⅠ…寄宿舎リバイバル時代にみる新築シェアハウスの価値		22	集合住宅、寄宿舎、シェアハウス	
集まりのしかけⅡ…住み手のターゲットングで地域に開いた共用部をつくる		24	集合住宅、間貸し付き住宅	
コラム01…空き家激増時代の住宅とエリアの魅力		26		
5		02 働く	住みながら働く…セル・グリッドが活きる診療所併用住宅	28
	集まって働く…多様な活動を誘発する貸しオフィス環境		30	オフィス、テナントビル、集合住宅
コラム02…建築的工夫によって進化するビジネスホテル	38			
効率よく働く…仕事の進め方・快適さを追求したオフィスビル	32		自社オフィス	
刺激しながら働く…スキップボイドでアイデアの創発を促すオフィス	36		自社オフィス	
7	03 育つ・学ぶ		地域で育つ…異年齢で育つ寒冷地のオープンな保育園	40
まちで育つ…街育とセキュリティに考慮したカフェ併設の保育園		44	保育園、飲食店、地域コミュニティ	
8		オープンスクールの先へ…雑木林に教室群がすべり込む小学校	46	小学校、都市空間
9		アクティブラーニング…部屋と動線があみだくじのようにつながる建築	48	大学施設、講義室、学生ホール、食堂
10		学びの図書館…4つの機能が入り交じった市民の交流拠点	50	図書館、公民館、コミュニティセンター、生涯学習センター
11		コラム03…未来の子供たちの環境	54	
10	04 いやす・治す	都市に滞在する…場所性を読み込みゼロからプログラミング	56	ホテル施設
		自然に滞在する…集落の風景づくりとしてのリゾート計画	58	旅館、ランドスケープ
11		コラム04…おもてなしとホスピタリティの建築	68	
地域の医療拠点…クリニックと病院の機能を分けた医療施設		60	病院、クリニック	
都市の医療拠点…地域になじみ地域社会に浸透する医療建築		64	総合病院、地域参加型デザイン	
高齢者の居場所…家スケールでつながれた2つのデイ施設		66	高齢者福祉施設、在宅介護サービス拠点、デイサービス拠点	
12	05 楽しむ・集まる	都市を集める…等身大の建築スケールの場づくり	70	商業施設、文化施設、都市空間、広場空間
		人の動きをつくる…客の好奇心を高めて回遊性を生む	72	商業施設、集客拠点、アーバンコンプレックス
		コラム05…賑わいを生みだす一体空間	78	
プログラムを変え…商業施設にコミュニティ活動の場を組み込む		74	テナントビル、コミュニティスペース、市街地再活性化	
13		交流を生む…集まりや活動をつなげる空間の連続性	76	公民館、コミュニティセンター、ホール
14	06 再生する	公共施設…新しい用途に生まれ変わる	80	コミュニティセンター、高齢者福祉施設、リノベーション
		旧駅の遺構…既存の空間ポテンシャルを最大限に活かす	82	商業施設、リノベーション、産業遺構再生
		コラム06…デザインによるバリューアップ	90	
木質アパート…木造長屋を壊さずに活かした集合住宅		84	集合住宅、リノベーション、ブランド戦略	
15		廃校中学校…アートと街をつなげる廃校中学校の再生	86	中学校、コミュニティスペース、ギャラリー、リノベーション

※1単元90分、15回分を目安としています。

01 住む

①自然と住むⅠ	ノラ・ハウス／東京工業大学塚本研究室+アトリエ・ワン	自然の摂理を巧みに取り入れた住宅008
②自然と住むⅡ	柿畑のサンクン・ハウス／小嶋一浩+赤松佳珠子(CAT)	農業緑地と一体になった住宅010
③都市と住むⅠ	集密の住居／五十嵐淳建築設計事務所	極小空間の集密により空間の拡がりを感じさせる012
④都市と住むⅡ	LIFE IN SPIRAL／高柳英明建築研究所	都市景観を楽しむスパイラル「立体縁側」014
⑤集まって住むⅠ	北浦和 VALLEY／川辺直哉建築設計事務所	集合住宅の共用部を周辺環境と連続させる016
⑥集まって住むⅡ	都立大学テラス／室伏次郎(スタジオアルテック)	「中地・長屋・囲み型」で都市的中庭を020
⑦集まりのしかけⅠ	LT城西／成瀬・猪熊建築設計事務所	寄宿舎リバイバル時代にみる新築シェアハウスの価値022
⑧集まりのしかけⅡ	ヨコハマアパートメント／西田司+中川エリカ(オンデザイン)	住み手のターゲットングで地域に開いた共用部をつくる024

COLUMN 01 空き家激増時代の住宅とエリアの魅力 026

02 働く

①住みながら働く	ちよだの森歯科診療所／小川博央建築都市設計事務所	セル・グリッドが活きる診療所併用住宅028
②集まって働く	Grotto／芦澤竜一建築設計事務所	多様な活動を誘発する貸しオフィス環境030
③効率よく働く	清水建設本社／清水建設	仕事の進め方・快適さを追求したオフィスビル032
④刺激しながら働く	乃村工芸社本社ビル／日建設計+乃村工芸社+大林組	スキップボイドでアイデアの創発を促すオフィス036

COLUMN 02 建築的工夫によって進化するビジネスホテル 038

03 育つ・学ぶ

①地域で育つ	あきたチャイルド園／サムコンセプトデザイン	異年齢で育つ寒冷地のオープンな保育園040
②まちで育つ	まちの保育園／宇賀亮介建築設計事務所	街育とセキュリティに配慮したカフェ併設の保育園044
③オープンスクールの先へ	宇土小学校／小嶋一浩+赤松佳珠子(CAT)	雑木林に教室群がすべり込む小学校046
④アクティブラーニング	KYOAI COMMONS(共愛学園前橋国際大学4号館)／乾久美子建築設計事務所	隣り合う部屋と動線が繋がる学びあいの場048
⑤学びの図書館	武蔵野プレイス／kw+hg アーキテクト	4つの機能が入り混じった市民の交流拠点050

COLUMN 03 未来の子どもたちの環境 054

自然と住む
都市と住む
集まって住む
集まりのしかけ

住む

01

04 いやす・治す

①都市に滞在する	渋谷グランベルホテル / UDS
場所性を読み込みゼロからプログラミング056
②自然に滞在する	星のや 軽井沢 / 東環境・建築研究所+オンサイト計画設計事務所
集落の風景づくりとしてのリゾート計画058
③地域の医療拠点	西能クリニック+西能病院 / ヘルム+オンデザイン+鹿島建設
クリニックと病院の機能を分けた医療施設060
④都市の医療拠点	総合病院 南生協病院 / 日建設計
地域になじみ地域社会に浸透する医療建築064
⑤高齢者の居場所	デイ・ホーム玉川田園調布 / 世田谷区営繕課・ヘルム建築・都市コンサルタン
家スケールでつながれた2つのデイ施設066
COLUMN 04 おもてなしとホスピタリティの建築	068

05 楽しむ・集まる

①都市を集める	代官山 蔦屋書店 / クライン ダイサム アーキテクト+アール・アイ・エー
等身大の建築スケールの場づくり070
②人の動きをつくる	なんばパークス / 大林組、日建設計、ジャーディ・パートナーシップ
客の好奇心を高めて回遊性を生む072
③プログラムを変える	Maruya gardens / みかんぐみ
商業施設にコミュニティ活動の場を組み込む074
④交流を生む	豊田市生涯学習センター逢妻交流館 / 妹島和世建築設計事務所
集まりや活動をつなげる空間の連続性076
COLUMN 05 賑わいを生み出す一体空間	078

06 再生する

①公共施設	八女市多世代交流館「共生の森」 / 青木茂建築工房
新しい用途に生まれ変わる080
②旧駅の遺構	マーチエキュート神田万世橋 / みかんぐみ
既存の空間ポテンシャルを最大限に活かす082
③木賃アパート	大森ロッヂ / ブルースタジオ+アトリエイーゼロサン
木造長屋を壊さずに活かした集合住宅084
④廃校中学校	3331 アーツ千代田 / 佐藤慎也+メジロスタジオ
アートと街をつなげる廃校中学校の再生086
COLUMN 06 デザインによるバリューアップ	090

写真・図面・図表のクレジット 091

索引 092

自然の摂理を巧みに取り入れた住宅

「家のつくりようは夏を旨とすべし」と徒然草にもあるように、高温多湿な日本の気候のなかで心地よい住宅環境を得るには、夏場の日射遮蔽や通風確保、室内の温湿度を適正に保つ工夫が不可欠である。エアコンや設備機器によって強制的にコントロールする技術もあるが、ここでは光や風などから生じる自然現象をうまく取り込むことで快適な室内環境を得ている住宅事例を取り上げる。

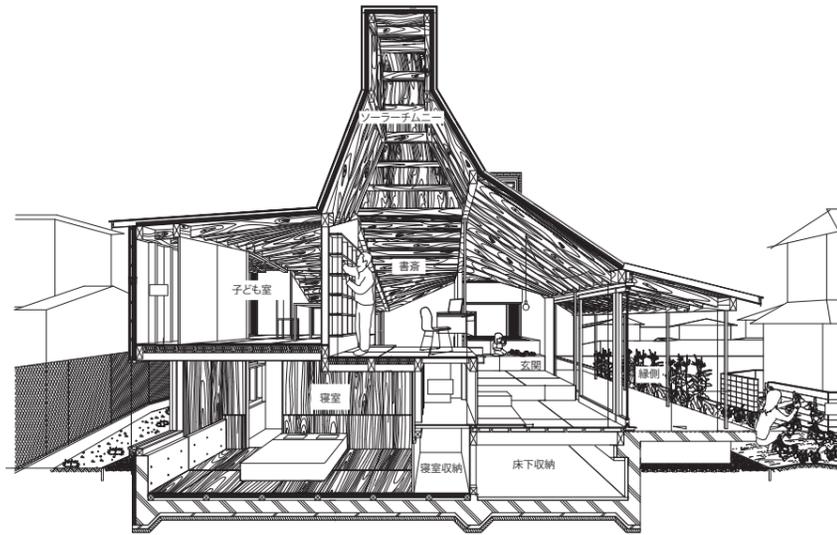


図1 A-A'断面パース S=1:120



写真1 西側から見た全景
緑側と家庭菜園が街に対して活発で楽しい雰囲気を街並みに対して見せている。ソーラーチムニーの役割を果たす2つのピークをもつ大屋根が特徴的である。



写真2 リビングから見る
右に予備室、左にダイニング。

◆間取り、空間構成、環境性能を同時に計画する

室内の空間構成を見てみると、主寝室・浴室等はいずれもしっかりと壁で囲われプライバシーが高められている。これに対し、リビングを中心に子ども室・ダイニング・書斎・予備室はレベル差をもった一体空間となり、フリーな動線を伴っている。特徴的な大屋根には2か所のソーラーチムニーがあり、夏季の屋根面への日射による重力換気(温度差を利用した自然換気)を促すため、この一体空間が空気の流れの通り道になっている。またこれらの頭頂部には、直射光を避けられた窓から、屋根天井を伝い優しい光が取り込まれる。

このように、諸室の間取りや配置を考えるうえでは、①動線、②空間構成、③採光・通風等の環境性能について同時に考える必要がある。①に関しては、廊下や階段など、一日に何度も行き来する場所であるため、使い勝手がよく、できるだけ短く単純な動線を考えるとよい。②については、住み手の家族構成や子ども・高齢者・要介護者の有無などをはじめに考慮し、各居室の位置関係や広さ、部屋数を考慮する。また兄弟姉妹の子ども室などは、はじめは1部屋でもよく、将来にわたって区分したり、独り立ちに応じて部屋の用途を変えられるようにしておくのもよい。③に関しては、この事例のように日射方向や重力換気、温熱効果などの自然の摂理にアイデアを求めると面白い。また伝統的な民家様式を詳しく見てみると、現代住宅では忘れかけているような環境共生の知恵がある。そうしたものを参考にするとよい。

※1 独立住宅とは、家族やまとまりのある1世帯が独立して住む形式の住宅をさす。これに対して集合住宅とは、複数の世帯が同じ一つの建物に住む形式のことをさす。また併用住宅とは、個人商店など店舗や作業場を住宅の一部として併用する形式をさす。また独立住宅は、建築関連条法では「専用住宅」と呼ばれる。

生理衛生	住戸空間				住戸まわり空間		公共生活空間
	家事サービス	個人空間	家族空間	接客空間	屋外生活空間	近隣生活空間	
使用	台所	寝室・私室	食事室	応接間	玄関	テラス	道路
浴室	洗濯室	勉強室	ダイニング	客間	ホール	庭	公園
洗面所	ローティライ	書斎	キッチン	廊下	廊下	バルコニー	各種施設
脱衣室	家事室	趣味室	居間	階段	階段	カーポート	
化粧室	物置	趣味室	娯楽室	勝手口	勝手口	遊歩道	
	納戸・押入	機械室				物干場	
						プレイロット	

表1 独立住宅における生活空間の構成
設計の前段階では、住宅に必要な諸室や空間要素を理解しておくとい。設計と併せて家族構成に合わせて取捨選択し、面積やか所数、配置検討へと作業を進める。

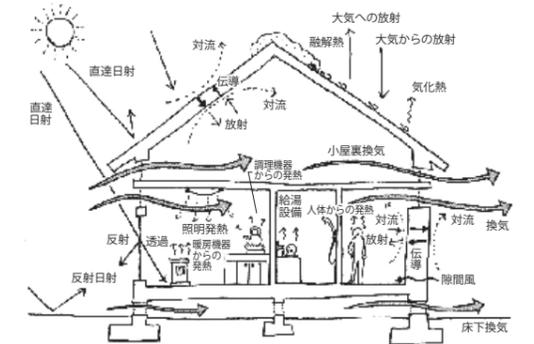


図4 住宅における熱の流れ
直達日射による温熱の伝導や、それに伴う室内空気の対流を考慮して、快適な室内環境を得ることを目指す。採光を確保しつつ直達日射による室温上昇をふせぐには、庇や軒を深めにし、地表面からの反射日射を取り入れるよう工夫するとよい。快適な室温を保つべく、換気や通風のための開口を随所に設ける。これらに加えて換気・冷暖房設備によりその時々に応じた適切な温熱の状態をコントロールできるようにしておく。また降雪地では、屋根に積もった雪や雨粒の融解・気化熱による熱損失についても考慮し断熱方法を考えるとよい。また接地階の床下は、土間による湿気上昇から、カビ定着や構造部材の腐食等が懸念されるため、換気口の位置や方向に不備がないか見ておくべきである。

◆光、風、街との関係から配置を考える

現代住宅は、強く頑丈な構造体の考案や、高効率な断熱技術などにより、全国各地で建てても同等の快適性・安全性が得られるまでになった。だがそれでも、計画する敷地がもつ独特の豊かさを活かしつつ、今を生きる住み手のライフスタイルに合わせてデザインすることは、建築家や設計者にとって極めて興味深く、チャレンジングな課題である。ここで示す独立住宅^{※1}の事例は、緑側、菜園、軒、ソーラーチムニーといった計画要素によって、自然環境の恵みをどう取り入れるか、現代生活を送るうえで周辺とどのように関係をもつたらよいか、よい答えを示している。

通常、計画段階の初期では配置検討を行う。玄関・アプローチや駐車スペースは前面道路に近いほうが便利であり、リビング・ダイニングルームはなるべく明るく陽の当たる側にあるほうがよいとされるが、敷地面積や形状、窓前景観によって配置に制約を受けることもある。また周辺の街並みに対してある種のチャームポイントを考慮することも、景観形成のうえでは重要である。この事例では、深軒の緑側を玄関と兼ねシンプルに道路側に配置することで、大まかな住宅の表情を決定づけている。深い軒は直射日射を適度に遮り、前面に菜園を擁したテラス状の緑側は、夏季は打ち水によって涼気を、冬季には躯体蓄熱によって暖気を得る。

こうした配置検討と空間デザインは同時並行で進めていくのだが、綿密な敷地分析から多く答えが得られるため、光や風、街との関係など、配置図に書いてまとめるとよい。その際、周辺環境の情報をできるだけ忠実に描く。街路樹の位置や数、土地の起伏や傾斜なども描くとよい。つまり敷地の中の配置に留まらず、計画する住宅が環境の中でどう位置づけられるのかを引いた目で見るとよい。



写真3 緑側を見る



図2 配置 S=1:2000
敷地は畑の混在する郊外にあり、西側接道向きに緑側をみせる特徴的な配置計画がされている。敷地北側に玄関と駐車スペースがある。

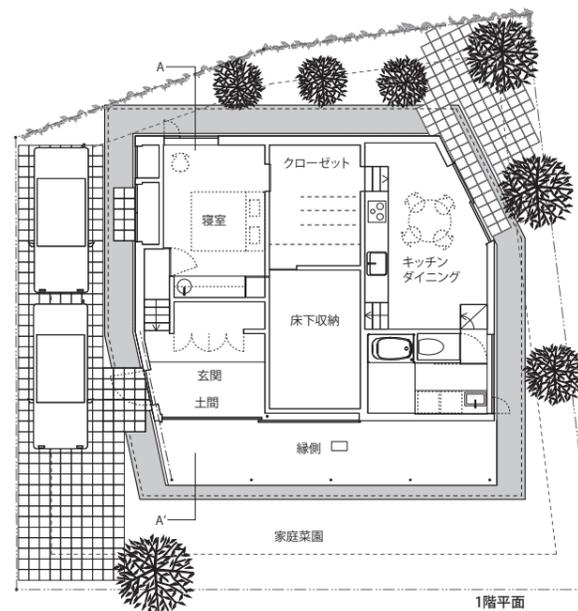
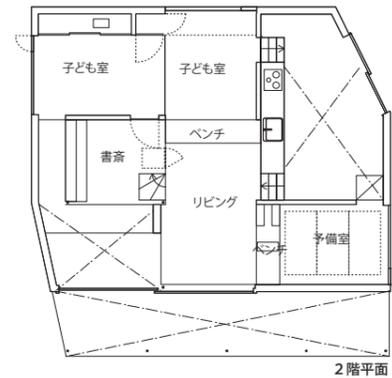


図3 各階平面 S=1:200

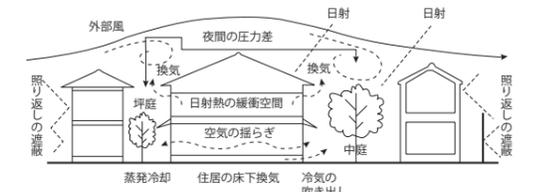


図5 自然現象を活かしたその他の事例(京町家)
古来、京町家には通り庭、坪庭と呼ばれる屋外空間があり、夏場に打ち水をし、涼気を得ていた。また大小複数の坪庭がある場合、剥離通風の圧力差を用いて空気の流れをつくっていた。

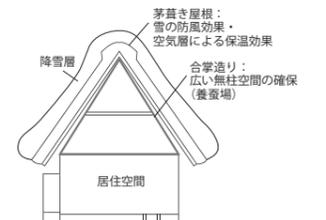


図6 自然現象を活かしたその他の事例(合掌造り)
岐阜の合掌造り家屋では、厚い茅葺き屋根の空気層によって寒冷期の保温効果を高めていた。また小屋裏を作業場、軸組下を居住空間としていたのも極めて合理的な知恵であった。

農業緑地と一体になった住宅

住宅は、身体感覚にほど近く、もっともシンプルな建築計画の建物である。伝統民家の様式に始まり、西洋洋間の誕生、戦後のnLDK型プラン導入による食寝分離の考え方も導入されるなど、他の建築物に比べ自由度が高く、実に多様である。近年ではとくに、自然・都市環境をどう室内に取り込むかの先進的なモデルも多く見られる。ここでは柿畑と共生する住宅計画を取り上げる。



写真1 東側柿畑より見る



図1 配置 S=1:2000
敷地境界の北側と東側に広がる柿畑。西側で公道に接している。



写真2 居間側から見る
南側から見る低床の1階部分と地表面の関係。

◆視線の断面計画 — 柿畑の林冠の下に住む工夫 —

自然豊かな場所に住宅を計画するとき、気になるのは窓からの眺めである。樹木や植栽から十分な引きがある場合はあまり気にならないが、窓前に枝振りが迫ってくるようならば、折角の自然環境もかえって鬱陶しく感じる。しかしこの事例では、北側と東側に生産緑地があり、高さ3m弱の柿畑が敷地境界いっぱいまで迫ってきているため、1階床を地面より700mm下げ、密に並んだ柿畑の枝振りの重なりからつくられる高さ2mの林冠にあわせて天井高を設定している。つまり林冠の下に広がる心地よい木陰の空間と、室内環境を連続的に感じられるような工夫がなされていて、1階床に立って外を眺めると、水平方向には視線が抜け、上方には枝越しに空が見えるという趣きある眺望が得られる。まさに柿畑の下に住む断面をしている。屋根は広いルーフトラスになっており、下層と一変して柿畑を上から一望できる。農業用の柿の木は、果実の収穫量を確保するべく、定期的な剪定によりその高さが低く抑えられる。つまり将来的にあまり大きく育ていかないため、建築づくりの物差しにできたわけである。このように自然物と一緒に住むためには、その自然や樹木の寸法だけでなく、将来にわたってどのように成長・繁茂を続けていくのか、それらについて熟知しておくことが大事である。

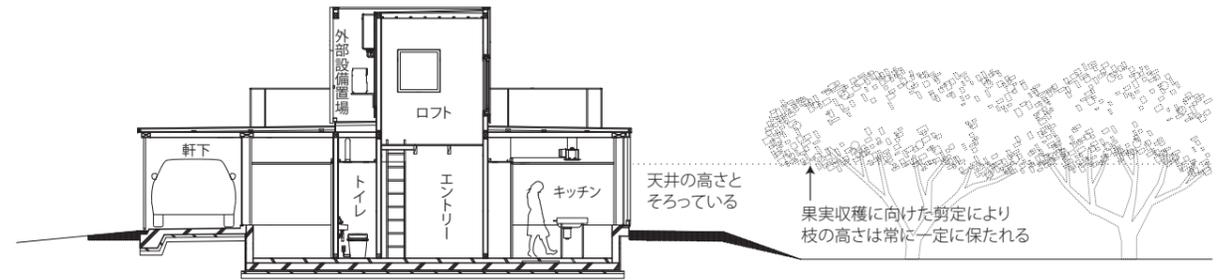


図2 断面 S=1:150

◆昼と夜で変化するフレキシブルなプラン

この事例は、敷地が広いながらも、建築面積は87㎡程度とやや控えめな小さな住宅で、昼間は中心のコアを取り囲むようなワンルームになる。コアの外郭ラインに沿って16枚のパーティションと十字に交差する可動レールがあり、このパーティションをさまざまに閉じていくことで、夜には水回りや寝室など、各室の用途に応じて閉じた空間を囲うことができる。外壁はすべてガラス面であるが、ダブルのカーテンレールにより、適宜プライバシーの確保ができています。またパーティションレールは、十字の部分においてT字鋼の突端を建具幅だけ切り落としてあるため、レールを交差してスライドさせることができる。

このように、広い空間をグリッド状に仕切るのは、日本の伝統的民家の襖を介した四つ間取りに似ているが、四つ間取りには独立した廊下がない。この事例では、コアのさらに内部にある収納を兼ねた「エントリー」によって動線の補完を試みているのが実に興味深く、つまり9つの間取りに分けながら、移動の際に部屋を横断する必要がないのである。コア型の住宅事例は新旧問わず散見されるが、この事例のような「中空コア型」を用いてフレキシブルなプランを試みた事例は希有である。住宅は、新しい建築のアイデアをどんどん試すことができる魔法の箱のようなものである。



写真3 低床フロアと柿畑の眺め
地表面より700mm下がった床に立った視点から、林冠の下部の広がりがあるで室内環境の延長のように見える。

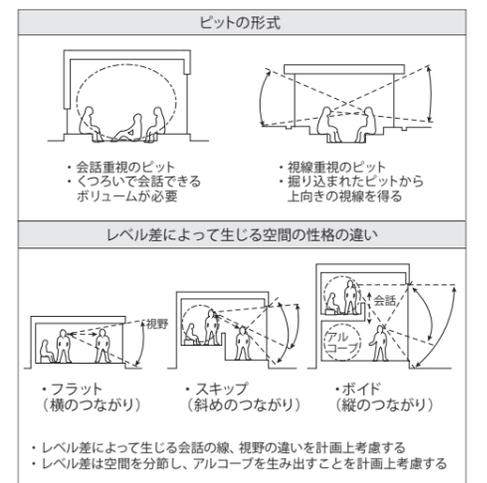


図4 視線の計画モデル

窓や開口を設ける際は、その空間での人の視線の高さを考えて視線の断面計画を行う。例えばこの事例のように、影り込まれたビット(低床居室)での床座、イス座、立位の各視点の高さを仮に決め、窓を介して切り取られる眺望の広がりを断面図などに書き加えることで模式的にシミュレーションができる。

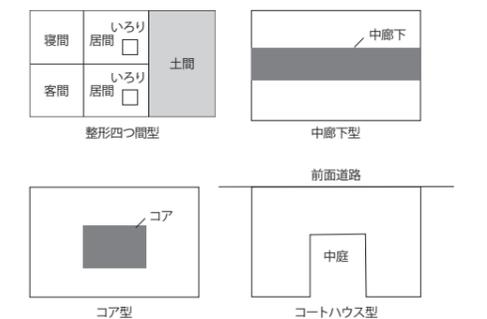


図5 住宅の典型的な平面形式

古来日本の伝統的住宅では、板戸やふすまで区切った田の字の四つ間取りが多く見られたが、大正時代初期頃には住宅の西洋化が進み、浴室や洗面所などの水まわりと居室を分けたり、次第に洋室を取り入れる住宅が増えた。その結果、住宅の中央を廊下で分け、居室を壁で仕切った中廊下型が多く見られるようになった。近年でも比較的建築面積が広く、南北に部屋を割り振るときはこの形式を用いる。コア型は、階段室や水まわりを一か所にまとめて配置するためスペース効率がよく、また設備面でも合理的であるため集合住宅などでよく用いられる。コートハウス型は、都市部など狭小敷地などにおいての庭や外部スペースの確保と居室の採光を得る場合によく用いられる。

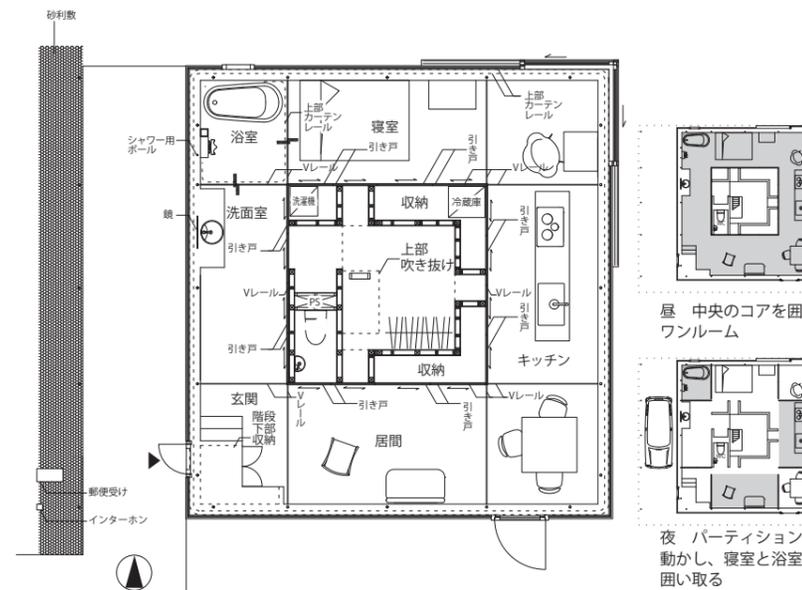


図3 1階平面(S=1:150)と「エントリー」を内包した中空コアと間取りの変化
右上が昼間の間取り、右下が夜あるいは就寝時の間取り。本書では中空コア型と呼んでいる「エントリー」とパーティションの閉じ方によって、適宜必要に応じてプライバシーをコントロールしつつ、家族のアクティビティを多様に受容する「揺れ動くプラン」を実現している。